

一

「御免」

少し職業的に落着き払った声、銭形平次はそれを聞くと、脱いでいた肌を入れて、八五郎のガラッ八に目くばせしました。生憎きようは取次に出てくれる、女房のお静がいなかったのです。

「へッ、あの声は臍から出る声だね」

ガラッ八は頸を縮めて、ペロリと舌を出しました。

「無駄を言わずに取次いでくれ」

「当てっこをしましょうや、——年恰好、身分身装」

「馬鹿だなア」

「まず、お国侍、五十前後の浅黄裏かな」

ガラッ八は尤もらしく頸を捻ります。

「訛がないぜ、——それに世馴れた調子だ——まず大家の用人というところかな」

平次もツイ釣られます。

「御免」

もういちど、錆のある素晴らしい次低音が、奥のひそひそ話を叱るように響きました。

「それ、お腹立ちだ。言わないことじゃない」

ガラッ八は月代を薬指で搔いて、もういちどペロリと舌を出しながら、入口の方へ飛んで行きます。

「仔細あって、主人御名前の儀は御免蒙るが、拙者は石川孫三郎

と申す者。平次殿にお願いがあつて罷り越した、ほんの一寸逢つて頂きたい」

少し横柄おうへいですが、ハキハキと物を運び馴れた調子です。

「お聞きの通りだ、親分、——この賭かけは口惜くやしいが親分の勝さ、四十五六の型へ入れて抜いたような御用人だ。逢いますか、親分」

ガラツ八はモモンガアみたいな手付きをして見せます。

「御武家は苦手だが、折角せつかくこんな所へ来て下さったんだ、とにかくお目に掛かるとしよう。此方こちらへ丁寧にお通し申すんだ」

「お家の重宝友切丸ともきりまるか何か紛失ふんしつしたんだろう、むずかしい顔をしているぜ、親分」

「無駄を言うな」

「へエ——」

ガラツ八はようやく客を導いて来ました。前ぶれ通り、存分に野暮なまつたい四十五六の武家、羽織の紐かんぜを観世かんぜ縵よりで括くくつて、山の入った袴はかま、折目高の羽織が、少し羊羹色ようかんいろになつていようという、典型的な御用人です。

「これは、高名なる平次殿でござるか。拙者は石川孫三郎と申す、以後御見識みしきり置きを願いたい」

肩肘かたひじを張つて、真四角にお辞儀をします。

「へエ、恐れ入ります。私は平次でございます。どうぞ、お手をおあげ下さいまし」

平次はすっかり恐縮きようしゆくしてしまいました。どうも一番あつかい悪い種類のお客様です。

「早速ながら、用件を申上げるが、実は平次殿、お家に取つて容易ならぬ事が起つたのじゃ。何とか力を貸しては下さるまいかの」

武家は折入った姿ですが、平次は何かしら釈然とし^{しゃくぜん}ないものがあります。

「どのような事が存じませんが、私は町方の御用を承^{うけたまわ}っているもので、御歴々の御屋敷の中に起ったことへは、口をきくわけには参りませんが、へエ」

体よく敬遠するつもりでしょう、平次は紙袋を冠^{かぶ}った猫の子のように尻ごみをして居ります。

「御尤^{ごもつともせんばん}千万、だが、——平次殿に乘出して頂こうと言うわけではない。ほんの少しばかり、知恵を拝借すればよいのじゃ」

「へエ——」

「実は御親類筋の安倍丹之丞様から、平次殿のことを承^{うけたまわ}って参ったが、この謎^{なぞ}を解くものは、江戸広しと雖^{いえ}どもまず平次殿の外にはあるまいと——」（第二巻「傀儡名臣」参照）

「御冗談で——」

押の強そうな用人に捉^{つか}まって、銭形平次もことごとく降参してしまいました。

二

この勝負はとうとう石川孫三郎の勝でした。平次を口説^{くど}き落すと、

「実はこれじゃ」

懷から取出したのは、小さく畳んで紙入に挟^{はさ}んだ小菊が一枚。畳の上にひろげて、平次の前へ押しやるのです。

「これは？」

「見らるる通り、一枚の小菊の中ほどに、紅筆で書いた、得体の知れない仮名文字が二十五ある」

「へエ——」

差覗くまでもありません。女の使う笹紅を、筆に含ませて書いた文字が二十五。平次が見てもなかなかの達筆ですが、不思議なことに、最初の一行が『あなかしこ』と読めるだけ、あとは、どう読んでも意味が通じません。

その全文を掲げると、

あ	な	か	し	こ
え	の	ち	を	す
ま	い	わ	か	み
た	お	の	と	や
め	ち	ち	に	か

こんな具合になります。

「これが平次殿、お屋敷奥庭の祠、何様とも判らぬまま、お稲荷様と申している社殿の中にあつたのじゃ」

「へエ——」

「それも一度や二度ではない、三度までも」
石川孫三郎も、ゴクリと固唾を吞みます。

「どんな弾みで、見付けなすったんで？」

平次の好奇心もかなり揺ぶられます。

「二百十日の嵐で、お屋敷の廂も塀も、奥庭の祠もひどく傷んだ。あちらこちら手入れをする序に、雨漏のひどくなった祠も修繕させようと思うと、正面台の上に、これがキチンとのついていたの

じゃ」

「御本尊は？」

「御本尊と言つてはない。祠の中には、御幣ごへいが一本立っている切りだ。その御幣も雨漏りでひどく汚れたが、その御幣の前の台の上に、これが畳んだまま置いてあったのじゃ」

「汚よごれもせずに」

と平次。

「左様、——多分嵐の後で置いたものであろう。台はまだ乾き切つてはいなかったが、この紙には何の汚れもなかった」

「へエ——」

「それだけならよい。が、何と申しても不気味な紙片だから、拙者一存の取りはからいで、祠の前で焼き棄すててしまったが、翌る日の朝、何気なく覗のぞいて見ると、また同じものが台の上に供そなへてある」

「——」

「それも焼き棄てた、もうこれで大丈夫と思うと、今日——三日目に、またこの小菊が乗っている」

「誰かに相談しましたか」

「いや、——御主人様は永の御患おんわずらい、若殿様はまだお若い上に、

至つてお弱い方じゃ。こんな事を申し上げたら、お心持にもお身体さわにも障さわるかも知れない。三日目の今朝になって、お屋敷にこの春から泊とどまらないうちからいらっしやる、御親類の方——浅井朝丸様あさいあさまるという方に

相談申上げ、いろいろ考えたが、何としてもわからぬ。思案に余つて、いつぞや安倍丹之丞様から承うけたまわつた平次殿が名前を思い出し、押して参つた次第じゃ」

「よくお屋敷方の内神様で、塀の一箇所に凹くぼみを拵こしらえ、外から自由にお詣りの出来るようにしたのを見掛けますが——」

「いや、そんなのではない。塀は嚴重な板塀で、忍び返しまで打つてある、容易よういに外から入れる場所ではない」

「すると——」

平次はもういちど謎の仮名文字に目を落しました。

「そんな事はありませんが」

石川孫三郎の顔は硬張こわばりました。何と言おうと、どう誤魔化ごまかそうと、この悪戯いたずらは、屋敷内に住んでいる者の仕業しわざでなければなりません。

「ところで、この文句を読む見込みはどうしても、立ちませんかね」

と平次。

「残念ながら見込みはない。そつと写うつし取って、近所の手習の師匠にも見せたが、——もつとも浅井朝丸様は、これは学者や坊主は、読めまい、吉備真備きびのまきびの読んだ耶馬台やばだいの詩しのようなものだから、安倍仲磨あべのなかまろの蜘蛛くもでも下がってくれなきゃ——と申される」

「なるほど、耶馬台の詩見たいなものだ、——ところで御用人様、御屋敷に住んでいらっしゃる御人数は？」

「殿様は六十五におなり遊ばす、御病気で一年越しお床に就いた切りだ。若殿時之助様は二十五でまだお一人、よく出来た方だがお弱い。奥方はお勇様と仰っしゃって四十」

「若様とお年が十五しか違いますね」

「後添でいらっしゃる、若殿様とは継ましい仲なかだが、至いたってお睦むつましい。奥方には今年十九になる若葉様という、それはそれは綺麗

なお嬢様がある」

孫三郎はこの主人の娘がひどく自慢の様子です。

「それから？」

「掛^かり人^{うど}の浅井朝丸様、殿様の遠い甥^{おいご}後^かじゃ、これは二十七歳、文武の心得もある」

「――」

「外に拙者と、お腰元が一人、お松といってこれは十八、仲働^{ちゅううげん}が二十六のお宮という忠義者、下女が二人、それに鉄という中^{ちゅう}間^{げん}がいる。鉄太郎とか鉄五郎とかいうのであろう、請^{うけ}状^{じょう}に名前は書いてある筈だが、二十八になる良い若い者で、鉄、鉄で通っている」

「それだけですな」

「もう一人、門番は宇^う内^{ない}という老人夫婦、六十を越しているが、恐ろしく達者だ」

「――」

「外には、馬が一頭、猫一匹――」

「よく判りました。その御人数の中で、仮名文字をこれだけ綺麗に書けるのは、どなたでしょう」

「左^さ様、――まず腰元のお松と――」

「御嬢様の若葉様と、奥様のお勇様と――」

平次は指を折りました。

「いや、お嬢様や奥様は、このような悪^{いた}戯^ずを遊ばす筈はない」

「浅井朝丸様とやらも、書けば書けるのでしよう。若殿時之助様も、御用人のお前様も」

「飛んでもない」

石川孫三郎は大きく手を振ります。

「ところで御用人様」

ひどく改まった平次の顔を、石川孫三郎は不安らしく見上げました。

「この謎の仮名文字を読むと、決して幸せなことはございませんが、それでも読みたいと仰しやるでしょうか」

「？」

「この文字は恐ろしい言葉でございます。これが読めると、御用人様一日も一刻も安^{ひととき}い心がなくなるばかりでなく、お屋敷の皆様には恐ろしい疑^{うたがい}の雲がかかりますが、それでも——」

平次はもうこの謎を解いてしまった様子です。

「そう聞くと、私も迷うが、いずれにしても、そのままには相成るまい。それを読まずに焼いてしまったら、悪戯^{いたづらもの}者はまた四枚目を用意するだろう。悪いものなら悪いもののように、書いた者を詮議して、後の祟^{たた}りのないようにするのが、この石川孫三郎の勤めと申すものであろう」

「いかにも、御尤^{ごもつと}も、——では読み下します、御覧下さい」
「——」

平次の指の先は、小菊の真ん中、五つずつ並べて五行に書いた、三行目の三番目——一番真ん中のわ、という字を指しました。

「御用人様、私の指の動く通りに読んで下さい」

平次の指は紅筆で書いた仮名文字の上を、吉備真備^{きびのまきび}を救った蜘蛛^くのように動きます。

「何々、わ、か、と、の、お、い、の、ち、を、す、み、や、か、に、ち、ち、め、た、ま、え、あ、な、か、し、こ」

石川孫三郎の顔は、平次の指を追って読み上げるうちに真っ蒼

になりました。後の半分ほどは口の中で呟つぶやくだけで、最後の一句でゴクリと固唾かたずを吞みます。

あ-な-か-し-こ
え-の-ち-を-す
ま-い-わ-か-み
た-お-の-と-や
め-ち-ち-に-か

「御用人様、——若殿お命を速やかに縮め給え、穴賢あなかしこ——と紅筆で願文がんもんを書くような人間は、御屋敷に心当りはありませんか」

「ない」

孫三郎は深々と腕をこまぬいて、畳の縁ふちを凝じつと見詰めて居ります。

「読んで上げない方がよかったかも知りませんが、お屋敷にこんな大それた願文を書く人間がいちや抛ほうってはおけません。一度はイヤな思いをなさるつもりで、この書き手を捜し出し、後腐あとくされのないようになさいませ」

平次はこうでも言う外はありません。

「有難う。屋敷の名も申さず、定めし無礼な奴と思うであろうが、何事もお主のため、——この私に免じて許して下され。さっそく悪者を捜し出し、思い知らせた上、お礼に参るであろう。さらばじゃ、平次殿」

孫三郎は打ち萎しおれて帰って行きました。

「親分、変なことがあるものだね」

ガラッ八は酔っぱい顔をします。

「まだまだうるさい事になるだろうよ」
平次はまだ何か考えている様子です。

三

それから三日。

「御免」

錆のある声が少し落着きを失って、また平次の戸口を訪れ
た。

「親分、来たぜ」

「シッ、丁寧に取次ぐんだ」

平次に促されて、ガラッ八は石川孫三郎を案内して来ました。

「平次殿、——大変なことに相成った」

典型的な用人が、挨拶も忘れて平次の前にドカリと坐るのです。
「悪戯者が解りましたか」

「それがトンと相解らぬ、いや解ったつもりになったばかりに、
大変なことに相成ったのじゃ」

「——」

「平次殿、この上は隠しても無益なこと、何も彼も打明けて申上
げる。実は、拙者の主人と申すのは本郷元町に御屋敷のある、二
千五百石取の御旗本、横山主計様」

「大方見当は付いて居りました」

「なるほど、さすがは平次殿。主人御名前を隠し了せたと思った
のが拙者の浅墓さだ、——それはともかく、あの謎の文句を、立
帰って主人主計様にお目につけたところ、御病中ながら以ての外

の御立腹。若殿時之助様御命を縮めたいと思うものは、当屋敷内に、^{まま}継しい奥方お勇様の外にある筈はない——と仰しやる」

「御重態の床から起き上がり、奥様を御呼付け、弓の折れを持つての御折檻^{ごせつかん}じや」

「——」
平次も驚きました。かりそめに読んでやった謎^{なぞ}の言葉が、それ程の騒ぎを起そうとは思わなかったのです。

「御主人様の御考えも一応はもつともながら、奥様は、御同族の中にも聞えた貞節、二十年この方、手塩にかけてお育て申上げた、若殿時之助様の御寿命を縮めたいと思われる筈もない。拙者も必死とお止め申したが、御老体の一徹^{てつ}さ、何としてもお心が解けない」

「——」
「二日二た晩に及ぶ折檻^{せつかん}の後、奥様には、よくよく思い定めたものと相見え、昨夜、——深更^{しんこう}、見事に生害^{しょうがい}してお果てなされた」

「えッ」

平次は水をブツ掛けられた心持でした。

「たった一人の御跡取時之助様の御寿命を呪^{のろ}われ、殿御腹立ちももつとも至極^{しごく}だが、^{まま}継しき仲を疑われて生害して身の潔白^{けっぱく}を示された、奥様の御心中もお悼^{いた}わしい。今朝からお嬢様若葉様始め、召仕どもの嘆きで、お屋敷の中は滅入^{めい}ったような心持だ。それに、遺書の立派なお言葉に、殿も今さら後悔の御様子で、——何んにも仰しやりはしないが、黙って我慢していられるだけにお気の毒だ」

「――」
平次も何か自分が責められているような心持で、小さくなって聞いております。

「わけても若葉様は、母上様の潔白のため一日一刻も早く、その呪の願文を書いた悪戯者を捜し出し、父上様の御怒りも宥めて上げたいと、葬式の仕度もせぬおむずかりようじゃ。如何にも、尤も至極の願い、お嬢様の御心持をお察し申上げると、悪戯者を捜すのが何よりの供養じゃ――拙者も包み兼ねて、実はこうこうと、平次殿のことを申上げると、ではその平次殿とやらに、さつそく屋敷へ来て頂くように、お前がお迎えに行つて来いというお言葉じゃ。殿様、若様にも御異存はない、一刻も早く、平次殿が行つてくれなければ、奥方お勇様の御葬いの仕度も相成り兼ねる仕儀じゃ。どうであろう、平次殿」

石川孫三郎は、手を突いてまた真四角にお辞儀をするのです。
「よく解りました。いかにもお屋敷へ参りましょう」

「それでは、来て下さるか」

「元々私が余計な猿知恵を働かせて、あんな謎を解いたから起つたこと、――如何にもお供いたしましょう。悪戯者を取っちめて、キュウキュウ言わせなきゃ、この平次の心持が納まりません」

「では、平次殿」

「参りましょう。後と言わずに、今、直ぐ」

平次は帯をキュツと締め直すと、羽織を引っかけて、石川孫三郎に従いました。

「親分」

後ろからガラッ八の八五郎。

「来るがいい、手が欲しくなるかも知れない。十手なんか要るものか、相手は御大身の旗本屋敷だ」

四

元町の一郭^{かく}を占領した、宏大な横山主計^{かずえ}の屋敷。平次とガラッ八は、用人石川孫三郎に案内されて、裏門からお勝手へ廻り、奉公人達の好奇の眼に迎えられて、奥の主人主計の部屋に通されました。

「平次——と申すか、宜しく頼むぞ。世間へ聞えては、当家の瑕疵^{かきん}にも相成る、その辺抜かりなく——」

病床に半身を起したのは、頽然^{たいぜん}たる主人です。肝^{かん}の病で久しく寝て居たのが、三日前怒りに任せて奥方を折檻し、引続く心痛に疲れ果てて、物を言うのもおつくう、そう。

「畏^{かしこ}まりました」

平次はそう言うより外にありません。孫三郎に目配^{めくば}せられて、早々に引下がると、次は若殿時之助、これは敷居際で黙礼しただけ。

「平次と申すそうだな。宜しく頼みますぞ」

時之助はそれでも優しく声を掛けます。二十五というにしては、ひどく若く見えるのは、心も身体も弱いせいでしょう。でも何となく清純^{せいじゆん}な聰明^{そうめい}な感じがして、平次には好感の持てる青年でした。お嬢様の若葉には縁側から挨拶しました。小机に凭^{もた}れて、眼を脹^はらしておりますが、下膨^{しもぶく}れの細面が、類のない上品さです。

「お願い申します」

半分は口の中で言う言葉が、千万言の雄弁よりも、少なくとも、平次の後ろからヒョコヒョコとお辞儀をする八五郎には徹した様子です。

「お嬢様、きつとこの平次が、悪戯者を見付けてお目にかけます。——が、一つだけお尋ね申します」

「何など」

「お屋敷で口紅をお使いになるのは、どなたとどなたでございましょう」

「私と、それから松だけ、——母上はお用いになりません」

屹とした言葉は、死んだ母の無実を少しでも晴らそうと言うのでしよう。

「皆様御使の小菊を一枚頂戴いたしとうございます」

「——」

若葉は黙って手筐の中から一と束の小菊を取出して、平次の方に押しやりました。

「有難うございました」

一枚取って見ると、謎の文句を書いた紙と全く同じ漉きです。

「それから、これは私の紅、と、筆」

可愛らしい鏡台の抽斗しから出した紅皿が二つと、これも可愛らしい紅筆が一本、平次の前にそっと押しやるのでした。紅皿の一つは使いかけですが、筆の穂が太く柔かくて、とても、美しい仮名文字などを書ける品ではありません。

それから平次は掛り人の浅井朝丸に逢いました。二十七八の髯跡の青々とした好い男、学問も武芸も相当らしく、わけでも銭形平次の近頃の働きにすっかり夢中になっている様子です。

「御苦労だな、平次」

「恐れ入ります」

「何か手掛りは見付かったか」

「何んにも解りません」

「紅筆で仮名文字を書いたから、女の仕業しわざと考えるのは少し早合点だな。現げんに叔父上はそれでしくじったのだ」

浅井朝丸は穿うがったことを言います。

「御尤ごもつともで」

平次はそれに軽くなずきました。良い参考になると思った様子です。

それから腰元のお松にも逢いました。十八というにしては、ませた娘で、可愛らしくも惻りはつ発でもありますが、持っていた紅皿は、指の跡が沢山あるだけ、紅筆を使った様子も、紅筆などを持っている様子ありません。

「若殿様をどう思う」

「御慈悲深い方でございます」

何かしら、あこがれを持った眼を、平次がジッと見詰めると、お松は真っ赤になって差しうつむきました。

仲働のお宮は働くより外に望のぞみも興味もない女。外に下女が二人、年寄の門番夫婦にも逢いましたが、何の変哲ありません。

「もう一人、中間ちゅうげんの鉄てつがおります」

「なるほど」

平次は孫三郎に案内されて、中間部屋に入って行きました。

「鉄はちょうどいいようだが」

「中を見ても構わないでしょうな」

「構わないとも」

孫三郎のうなずくのを見ると、平次は中間部屋に入って行きました。三畳の隅っこに、蜜柑箱みかんが一つ、行燈あんどんが一つ、蜜柑箱は机の代りになるらしく、その上に硯箱すずりばこが置いてあって、箱の中には、手習をした塵紙ちりがみが二十枚ばかり重ねてあります。取上げて見ると、何か往来物おうらいものを習っている様子、下手へたは下手ながら、一生懸命さが溢あふれているのも不思議です。

「余よっ程心掛ほどの良い男ですね」

「渡り中間には珍しい男だ」

「どれどれどんな物を持っているか」

三尺の押入を開けると、上は夜物、下は竹行李たけごうりが一つ、蓋ふたをあけると、中から着替えが二三枚と、新しい手拭と三尺と、塵紙ちりがみが少々、それに小銭の少し入った財布さいふと、紙の包みが一つあります。

中を開けて見ると、

「あッ」

三人声を合せたのも無理はありません。紙包みの中から出て来たのは、真新しい天群上てんぐんじょうで包んだ紅皿が一つ、赤い半襟はんえりが一つ掛けです。

「この野郎だッ」

わめく八五郎。

「待て待て、紅皿は真新しい、買ったばかりで手が付いていない、

——それに半襟だけは余計だ」

平次は落着払ってその下を見ると、底の方へ押込むように入れているのは、一口ひとふりの匕首あいくち、抜いて見ると、思いの外の凄い道具で

す。

ちようどその時、中間の鉄がノソリと帰って来ました。一と目様子を見て取ると、

「何をしやがる、——誰に断つて人の物に手を掛けるんだ」

平次の襟髪へ手を掛けます。

「野郎ッ、御用だぞッ」

ガラッ八はその後ろから飛付きました。

「何をッ」

振り返った鉄の拳が、思い切りガラッ八の頬ほおに鳴ります。

「神妙にせい、御用だぞッ」

猛然と掴つかみかかる八五郎、二人は一瞬動物のように争あらそいました。

が、とうとう八五郎が勝つて、鉄を膝の下にギュッと引据えます。

黙ってそれを見ている平次。

「親分、縄を、縄を」

ハネ返そうとする鉄を押えて、ガラッ八は必死と争いつづけるのです。

「もういい、縛らなくなつて、話は解るだろう、——鉄とか言ったな、——お前の留守に押入を見て悪かったが、御主人のお許しがあつたんだ」

「——」

ガラッ八の手を離れると、鉄はプリプリしながら起き上がりしました。二十七八の丈夫そうな男ですが、渡り中間のすれっからしなところがなく、なかなか良い印象いんしょうを与えます。

「お前に少し訊きたいことがある——この紅と半襟は何のために持っている」

平次の調子は静かですが、いや応言わさぬ強さがあります。

「紅や半襟を、折助おりすけや中間が持っていちゃ悪いのかえ、——夜鷹よたかや白首にやるんじゃないやねえ、十六になる妹に持つて行つてやるつもりで買つて置いたんだ」

「それは良い心掛けだ、——ヒ首あいくちは？」

「そいつは男の魂たましいだ。万一の時の用意に持つていちゃ悪いか」

鉄は事毎に逆さかねじを喰わせます。

「よしよし、それもお前の言うのを本当にしよう。ところで、お前は何か隠していることがあるようだ。町方の手で調べて解らぬことはないが、そんな事をして、身分素姓が知れると、お前の請人にんが飛んだ迷惑をするよ」

「お前も聞いた筈だ、昨夜ゆうべこのお屋敷の奥方が亡なくなられたが——それは悪者の悪戯いたずらから起つたことだ。詳しく言えば、紅筆で書いた願文から起つたことだ、——その願文を書いた奴は、下手人も同様だが——お前はその疑いを受けている。その紅皿の貰い手をつれて来て、お前と突き合せるまでは、許すわけにいかないよ——」

「お前の身許を洗つて見ようか、それともここで言つてしまふか、どうだ、鉄」

「——」
仲間の鉄は黙りこくつて下ばかり見詰めて居ります。深沈たる顔色です。

「八、この野郎は容易に口を割るめえ。請人さがを搜して、うんと絞つ

てみる。どうせ所名前も偽にせだろう。本当の素姓が判ったら、親も女房子も皆な縛り上げて来い」

平次は峻烈しゅんれつでした。

「よし、言うよ、皆んなブチまけるよ」

鉄は頭を上げました。

「紅筆の願文を書いたのはお前か」

石川孫三郎は掴つかみかかりそうでした。

「違くさうよ、御用人、そんな腐くさった女のような事をするものか。俺は如何にも、横山一家に怨うらみがある。わけでも若殿の時之助には、足を一本叩き折って、肥だめへ投り込みたいほどの怨みがある」

「黙れッ」

孫三郎は我慢がなり兼ねました。

「俺の母親が、ちょうどそんな眼に逢ったんだ。やい、味噌摺みそすり用人奴、よっく聞きやがれ」

鉄は言うのでした。——今から三年前、若殿時之助がまだ丈夫で元気だった頃、甲州街道を遠乗りして、笹塚ささづかで百姓女を一人蹄ひづめにかけて大怪我をさせたことがありました。女が高荷を背負っていたために、馬が驚いて狂奔きやうほんしたというのを理由に、氣の立っていた時之助は、怪我をして肥だめに落ちた女を見捨て、そのまま屋敷へ引揚げて来たのです。

女は鉄の母親でした。足を折った上、馬に蹴けられた場所が悪かったか、そのまま床に就いて枕もあがらず、あまりの事に、人を頼んで横山家に掛け合いましたが、剣もほろろの挨拶で、相手にもしてくれません。

鉄は多血性男子でした。母の看護を小さい妹に任せ、江戸へ出

て転々奉公しているうち、縁があつて、素姓を隠したまま、横山家の中間部屋に入り込んだのです。

「あわよくば殿様の前へ出て、思い切り啖呵たんかを切るか、若殿をもういちど馬に乗つけて、足の一本も折ってやろうと思つたのさ。殿様は御病氣、若殿も馬に乗る様子もねえ。いい加減に諦めてオシ出てやろうと思つている矢先だ、妹へ紅や半襟を買つたのは、久しぶりで笹塚ささづかへ帰る土産みやげだよ。解つたか、味噌摺り奴みそす、——手前は腹の悪い人間じゃねえが、主人大事が嵩こじて、外の者へツラく当り過ぎるよ、氣を付けやがれ」

「――」

石川孫三郎も一句もありません。

「紅筆の何とかを書いて、人に嫌がらせをするような、そんなケチな野郎じゃねえ。見損ないやがつたか」

鉄は土間に大胡坐おおあぐらをかいて、精いっぱいの啖呵たんかを切るのです。

「よしよし解つた。が、そう解つた上はこの屋敷へおくわけに行かねえ、俺と一緒に来い」

平次は静かに鉄の肩を叩きます。

「あ、何処へでも行くよ。憚りながら岡っ引はばかを怖こわがるような、そんな悪い事をした覚えはねえ」

立ち上がる鉄。平次はガラッ八を招くと、何やらささやいて、鉄をつれて自分の家へ帰しました。

「御用人様、奥庭の祠ほこらを見せて下さいませんか」

「いいとも」

石川孫三郎はホッとした顔で先に立ちます。

奥庭の祠には何の変つたこともありません。白い幣ぬさを立てた、

三尺四方ほどの堂と、賽銭箱と、鈴と、それに赤い小さい鳥居と。
「紅筆の願文は、嵐あらしの後で、堂を修復する話があつてから、見付
かつたのですね」

「その通りだ」

と孫三郎。

「その時堂の中は湿ぬれていたと言いましたね」

「最初のは、まだ乾き切らない台の上にのせてあつた」

「有難うございました。それじゃまた明日の朝参ります、——皆
んなへ、私がもういちど来ることを言つておいて下さい」

平次は変なことを言つて歸つて行きます。

五

その晩平次は、中間の鉄をなだめなだめ、いろいろの事を訊き
出しました。最初はプリプリしていた鉄も、平次の心持が解ると
次第に打解うちとけて、晩酌ばんしやくを附合いながら、滑なめらかに話すようになって
いたのです。

その話の筋を纏まとめると、腰元のお松は若殿の時之助と親しく、
一しきりは目に余ることもありました。身分の隔へだてがあるのと、
母親のお勇が厳きびしいので、二人は次第に遠ざかつて行くらしく、
お松に暇を出すと言つた、一時の噂も立消えになつていふという
ことでした。

もう一つは掛り人の浅井朝丸で、これは文字もあり、腕もよく、
一かどの人間には違いありませんが、少し道楽が過ぎるので、お
勇には受けが悪く、一時は若葉を妻に申受けて、浅井家を興おこそう

という話もあったようですが、いつの間にやらそれも沙汰止みになったということです。

「紅筆の願文を書くとなると、お松か、浅井朝丸のうちと言うことになるな。明日は多分判るだろう」

平次は何やら成算があるらしく、四方山よもやまの話に更ふかしてその晩は寝てしまいました。

翌る朝、ガラッ八と一緒に横山家へ行った平次。

「きょうは御家来衆奉公人をはじめ、お屋敷の皆さまの荷物を調べさせていただきます」

始めからこう言った振れ込みで、まず用人石川孫三郎の荷物をしらべ、掛り人浅井朝丸の手廻りの品を調べました。

石川孫三郎の荷物には、何にもあるわけがなく、浅井朝丸の部屋にも怪しいものは一つありません。この人はかなりのインテリらしく、むずかしい本が幾十冊と、机の上には、よい紙、よい墨、よい筆、よい硯すずりなどを取揃えてあります。

次は腰元のお松の部屋。

ここで平次は大変なものを見付けました。小さい手筐てばこの中にいつぞや平次に見せた紅皿の外に、もう一つ使いかけの紅皿があって、それには指でなく、筆の跡があり、その紅を使ったらしい軸じくの短い紅筆までが添えてあるではありませんか。

「これは？」

平次はお松の面前に突き付けました。

「あッ、——私は、私は何んにも存じません」

お松は青くなって立ち竦すくみます。後ろからは虎視眈こしたんたん々たるガラッ八の眼。

紅皿は半分以上剥^はげて、筆はかなり上等の細筆、軸^{じく}は半分ほどのところから切って捨ててありますが、穂^ほの根の方が薄黒くて、元は墨に使った筆を、洗って紅筆^{べにふで}にした様子です。

「お前のではないと言うのか」

「何んにも知りません。今朝まで此処にそんなものは入っていませんでした」

あまりの事に、お松は立上る力もなく、畳の上にヘタヘタと崩折れて、恐怖^{きょうふ}に見開いた眼が紅皿に吸い付いております。

「親分」

八五郎は後ろから、この娘の肩へ手を掛けそうにしました。

「待て、八」

平次は紅筆の穂を散らして、鼻の先へ持って来てちよつと嗅^かぎましたが、

「この人じゃない」

大きくかぶり^{かぶり}を振るのです。

「親分」

四方^{あたり}をねめ廻す八五郎。

「極^{ごく}く良い唐墨^{とうぼく}を使っている人間の仕業^{しわざ}だ、——それッ」
指した縁側には浅井朝丸が眼を光らせているのでした。

「野郎ッ」

飛付く八五郎。

「無礼者ッ」

一閃^{せん}、危うく身をかわした八五郎は、浅井朝丸の二度目の襲撃^よを除ける暇もありません。

「あッ」

縁側から足を踏み外して、もんどり打って庭へ落ちるのを、浴びせて一と太刀。

が、それは平次の投げ銭に封じられました。

「えーッ」

肘へ一つ、頬へ一つ、ひるむところを、飛込んだ平次は、猛烈に体当りを一つくると、浅井朝丸の身体は朽木の如く庭へ落ちます。

「待ってました」

飛付いた八五郎、こんどは用意の縄でキリキリと縛り上げてしまいました。

×

×

「親分、変な野郎がいるもんだね」

帰り途、ガラッ八は平次の説明を誘いました。

「あれは本当の悪党さ、——自分で謎の呪文を書いておきながら、用人に、耶馬台の詩みたいだ——って言ったそうさ。誰かに読んで貰わなきゃ困るが、自分で読んじゃ拙かったのさ。幸い俺は、辻講釈で聴いて、吉備真備が蜘蛛に教わって、耶馬台の詩を真ん中の一字から——東海姫氏の国——と渦巻形に読んだと知っていたから読めたのさ」

「じゃ始めからあの居候野郎が怪しいと睨んだんですか」

「そうでもない、一時はてつきり鉄の仕業と思ったよ。でもきのうの様子で鉄でないとは解った、——そこで、用人に言って前触れしておいて、きょう荷物しらべをしたのは、悪者の細工を見るためさ。それが凶星に当って、紅皿と筆をお松の手筐に入れたのは、罠に掛ったようなものだ」

「わざと筆の軸じくの銘めいを切って、善い筆か悪い筆か解らないようにしたが、上等の唐墨とうぼくを洗い落すのが、少しぞんざいだった」

「何だって新しい筆を使わなかったんでしょ」とガラッ八。

「字でも書こうという程のものは、妙に筆を惜おしがるものだよ。使い古した筆を洗ってごま化したのが間違いさ」

「それで市が栄えるわけだね、親分」

「横山家では無事に葬とむらいを出せるだろうし、鉄の野郎には三十両のお手当を貰って来たから、俺の仕事は済んだようなものだ」

平次はそう言って、懷に呑んだ三十両の小判にさわって見るのでした。これで鉄は笹塚ささづかへ帰って、母親の養生も存分に出来るというものでしょう。

「あの娘は綺麗だね、親分」

「だが、可哀想だよ、一番気の毒なのはあの若葉わかばとかいう娘さ」平次は暗然あんぜんとしました。本当に妙な事件です。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「錢形平次捕物百話」第九卷 中央公論社 昭和十四年八月五日発行

底本―「錢形平次捕物全集」第五卷 河出書房 昭和三十一年七月十五日初版

編集・発行 錢形俱樂部



銭形倶楽部

<http://www.zenigata.club/>